

月のみか露霜しぐれ雪までに  
さらしさらせるさらしなの里

おおきまちさんじょうさねなるぎょうしゅうとめ  
正親町三条実愛卿の姑 柳原大夫人



(佐良志奈神社の社標和歌)

平成25年



# 謹賀新年

平安時代の都人は「白」という色に対して特別な美意識を育み、「至高の美」を見るようになりました。神官の装束が白色であるように、「白」には「神聖」「高貴」「清浄」「清楚」「高潔」などのイメージが重ねられています。そうした美意識が凝縮しているのがここに掲載した和歌です。露や霜もいつの間にか雪に変わった、月の光を浴びて白いさらしなの里の純白さがより一層際立っている…月だけでなくすべてが真っ白になった里、それこそがさらしなの里だという意味です。

千曲市若宮区の佐良志奈神社の神社名が刻まれた石の社標（上の写真）に記されています。作者は江戸幕木の京都の貴族女性歌人。当時の佐良志奈神社神官の豊城直友さんが京都に訪ねて依頼し、詠んでもらったものです。「さらしな」という地名の響きに、平安から千年の後も、至高の美の色である「白」を見る美意識が受け継がれていたことを証明する和歌です。（この和歌についてはシリーズ3、157でも紹介しています）

